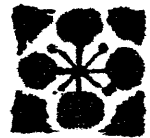


# 貝原益軒の保育観(二)

土 山 忠 子



前稿において、益軒が前近代の児童観の風靡した近世社会に

生きながらも、近代的児童観を指向し、幼児教育の重要性を知育・徳育・体育の全分野にわたって提唱したことを考察した。

さらに、『和俗童子訓』<sup>①</sup>を中心として、益軒の幼児教育に対する基本的理念を検討したいと思う。

## 三、人間環境の重要性の提唱

益軒は、「凡(そ)小児ははやくおしゆると、左右の人をえらぶと、是、古人の子をそだつる良法なり。必(ず)是を法とすべし」(卷之一)と、人間の教育においては、早く幼い時から教育すること、子どもをとりまく人間環境の選択という教育に

おける二つの柱を立てている。

「……性悪<sup>むまわつき</sup>くとも、能おしえ習はさば、必(ず)よくなるべし。いかに美質の人なりとも、悪くもてなさば、必(ず)悪しきにうつるべし。年少の人の悪くなるは、おしえの道なきがゆへなり。……況<sup>いは</sup>(んや)人は万物の靈にて、本性は善なれば、いとけなき時より、よく教訓したらんに、すぐれたる悪性の人ならずば、などかあしくならん」(卷之二)

益軒は、子どもの教育に当たって、素質より環境に力点をおいているように思われる。幼児教育の重要性を提起しているのも、「性悪<sup>むまわつき</sup>くとも、能おしえ習はさば、必(ず)よくなるべし」との教育による変化を確信していたからである。今日の「教育的環境学」<sup>②</sup>に至らないまでも、環境の子どもへの教育的

意義を強く認識していた。

益軒は、この教育観を基底として、人的環境が子どもの人格的成長にとって不可欠の因子であることを力説しているのである。子どもにとって、人的環境は「極めてダイナミックなもの」であり、「刺激の全体である」とさえいわれ、この全体的刺激によって子どもの活動や成長が導かれていくのである。

「左右の人、正しからざれば、父のいさめ行(な)はれず。心にかなひたるとて、子の害になる人を近づくべからず」(巻之一)

益軒は、人的環境を「左右の人」と呼び、友人・乳母・教師・父母というような、子どもの成長に影響を与えるすべての人を含めて考えている。

#### (a) 保育者について

益軒の時代は、今日のような幼児保育施設もなく、また保育という呼称も明治初期になって使用されたものであるから、ここでいう保育者とは、施設の保育担当者ではなく、専ら家庭を中心としたところの保育担当者即ち父・母・乳母・教師を含む広義での保育者と考えたい。

「心もことばも、万のふるまいも、皆其(の)かしづきしたがる者を見ならひ、聞ならひてかれに似するものなり」(巻之

一)

「師は小児の見ならふ所の手本なればなり」

「小児をそだつるには、さきにも聞えつるやうに、先乳母、かしづきしたがふ者を、えらぶべし。……凡(そ)小児は智なし。心もことばも、万のふるまいも、皆其(の)かしづきしたがふ者を、見ならひ、聞ならひて、かれに似するものなり。乳母、かしづきしたがふ人、あしければ、そだつる子、それに似てあしくなる。故に、其(の)人をよくえらぶべし」(巻之一)

「父たる者、威ありておそるべく、行儀ありて手本になるべければ……」(巻之二)

益軒は、先ずすべての保育者として心しなければならぬことは、保育者は、子どもが「見ならひ、聞ならふ所の手本」であるということである。そして、「かれに似するものなり」即ち、言わず語らず子どもは、保育者に似た者になるという。その似方も、ただ表面的な言葉や動作だけではなく、心も似た者になると、保育者の子どもへの感化力の強さを語っている。子どもがいかに、感受性、同化性、模倣性に富んだ者であり、保育者と子どもとの人格的關係が、子どもの人格形成にとって決定的な影響力をもつかを教えている。

益軒と同時代に生きた欧州の教育学者コメニウスも「教師自

らの高貴なる模範によって、生徒を力強く感動させることである<sup>⑤</sup>と述べ、現代のアメリカの教育学者ジョン・デューイも「教師は常に真実の神の予言者であり、また真実の神の国の案内者である」と語っている。

益軒は、子どもの手本であり、模範者である保育者にとつて、第一に具備しなければならぬ資格は、学問よりも人格であるとしている。

「いとけなき時より、いにしへのことをしれる、おとなしく正しき人をえらび用(ひ)て、師とし……必(ず) 邪(よ)俊・利口の人を、ちかづくべからず。かやうの人、はなはだ、人の子をそこなふものなり」(卷之一)

「才学ありても、悪しき師にしたがはしむべからず」(卷之一)  
「乳母を求むるに、必(ず) 温和にしてつつしみ、まめやかに、ことばすくなき者をえらぶべし」(卷之一)

保育者の役割は、子どもの知的指導に優って子どもへの全人格的触れ合いを第一に重要視し「学は人なり」の思想に徹底していたことを見出すのである。教育の本質は、保育者と子どもとの人格的に連帯した共同の活動にあり、保育者の人間性をはなれて教育は成立しないことを認識していた。

次に益軒は、保育者の人格を基調として、保育者に学問の必

要性を力説している。

「学問はその学術をえらぶ事を、むねとすべし。学のすじあしければ、かへりて性をそこなふ」(卷之一)

「邪悪の人にあらざれども、文盲にして学問をきらふ人は、よき事をしらで、幼少なる子の志をそこなふ」(卷之一)

益軒自身は、儒学者であると同時に、当時発達した科学のあらゆる方面に関心と見識をもち、当時においては最高レベルの科学者の一人であったといわれている<sup>⑦</sup>。また益軒がいかに博學多識で研究意欲の旺盛な人であったかは、益軒の読書内容の豊富なことや、その著述書の種類が、政治経済・教育・医学・文学・数学・地理・歴史・天文・道徳・物理等から易学に至るまであらゆる学問に及んでおり、しかも常識的知識にとどまらないで、専門的な研究の成果を書物として残しているのを見るのである。学問的素養を身につけることによって、子どもの教育に当たっては、子どもを心理学的にも生理学的にも観察し、理解する知性と方法が与えられ、子どもを必ず望ましい人間に成長させうることを教えている。

「子弟をおしゆるに、いかに愚、不肖にして、わか、いやしきとも、甚(だ)しく忿(い)りて、顔色とことばを、あららかにし、悪口して、はづかしむべからず……只、従答とし

て、厳正におしえ、いくたびもくりかへしやうやく、つげ戒むべし。是子弟をおしえ、人材をやしなひ来す法なり」(卷之二)  
保育者は、人柄と学問に加えて、保育者としての權威を要求している。

「父母厳にきびしければ、子たる者、おそれつつしみて、おやのおしえを聞いてそむかず……」(卷之二)

「父たる者、威ありておそるべく、行儀ありて手本になるべければ……」(卷之二)

權威や威嚴は、封建社会の代表的産物であると考えられ、ことに家長制における父親の權威は絶対的なものであったことはいうまでもない。

益軒の保育者に要求する權威は、ただ制度上から格付けされた權威を保持せよというのでなく、どこまでも「手本となるべければ」と書かれているように、模範者として見習うことのできる保育者の教育的權威を指しているのである。

制度上からくる權威は、抑圧の權威であり、盲目的な命令と服従関係であるが、教育的權威は、尊嚴と敬愛との人格的服従を意味しており、もっとも望ましい教育的関係を成立させる。

このように、人格的にも学問的にも尊敬し、信頼できる保育者によって、子どもが指導されることが、もっともすばらしい

教育的環境であるとしている。

#### (b) 友人について

子どもの人格形成において、保育者の影響と並んで重要な要素は、友人であることを益軒は強調している。

「貧家の子ども、はやくよき友にまじはらしめ」(卷之二)

「人の善悪は、皆友によれり」(卷之二)

「子弟をおしゆるには、先其(の)まじはる所の、友をえらぶを要とすべし。其(の)子のむまれつきよく、父のおしえ正しくとも、放逸なる無頼の小人にまじはりて、それと往来すれば、必(ず)かれに引そこなはれて、あしくなる」(卷之二)

友人の影響力が親よりも強いことに注意を促し、「麻の中なるよもぎは、たすげざれども、おのづから直し」とか「朱にまじわれば赤し、墨に近づけば黒し」などの古語を引用して、「よき友にまじはらしめよ」と提言している。

さらに、益軒の時代には、今日のような学校は無論のこと、藩学・郷学・寺子屋も未発達であったのにもかかわらず、子どもの教育は、家庭の中だけでは不十分であり、弊害さえ起こることを指摘しているのである。

「小兒十歳なれば、外に出して昼夜、師に随ひ、学問所まなこにをらしめ、常に父母の家をかす。古人、此(の)法深き意こころあり

いかんとなれば、小児、つねに父母のそばに居て、恩愛にならへば、愛をたのみ、恩になれて、日々にあまえ、きずいになり、艱苦のつとめなくして、いたずらに時日をすごし、おしえ行はれず。……故に父母のそばをはなれ、昼夜外に出て、おしえを師にうけしめ、学友に交はらしむれば、おごり、おこたりにく、知恵日々に明らかに、行儀日々に正しくなる。是古人の子をそだつるに、内におらしめずして、外にいたせし意なり」

(巻之二)

近世社会の鉄則であった『家』から子どもを外に出して、友に交わらしめることに教育的意義を認めた益軒の思想は、驚くほど進歩的であったといえる。この思想を現代的に解釈すれば「集団保育の重要性の提唱」といえるであろう。

集団保育は、子どもの自然な発達的要求であり、また社会性の陶冶の場であることは、今日の幼児教育においては、常識論であるが、今から二百五十年前の幼児教育にその必要性を提起したことは、益軒の幼児教育学者としての価値を認めなければならぬ。

益軒をして、子どもの教育にこのような結論を与えたのは、益軒が黒田藩に出入りして、格式高い『家』の中で教育される上流武家階級で、長年にわたって藩主や世子の侍講としてつ

とめた経験<sup>⑩</sup>と観察の結果から出た貴重な教育哲学ではなかつたかと推測するのである。

「高家の子には、いとけなき時より、正直にて知ある人を師とし友とし、そばにつかふる人をもえらびて、あしき事をいましめ、善をすすむべし」(巻之二)

過去のわが国の『家』であれ、今日の核家族の『家』であれ、子どもをその家の中だけで教育することは、結果としていずれも望ましいものではなく、子どもは子ども同士の生活や、遊びや、学習がもっとも自然的であり、子どもにとって真の教育的環境であることを教えているのである。

子どもの教育の領域において、子どもの人格形成にあずかる因子は、保育者や友人との人格的相互関係であり、この人的環境が決定的な役割を果しているのである。

#### 四、教育愛の提唱

子どもの正常な成長の基本的要因は、保育者と子どもとの関係であり、その大切な絆は、愛情であるということは、昔も今も変わらない真理であるといえる。

『和俗童子訓』の中に、益軒もまた、この保育者の子どもに

与える愛情について分析し、愛情の正しい与え方について多くの頁をさいて何度も語っている。

まず第一に、益軒の子どもへの愛情についての戒めは、「姑息の愛をなすべからず」ということである。

「凡（そ）小児をそだつるには、もはら（専）義方のおしえをなすべし。姑息の愛をなすべからず。義方のおしえとは、義理のただしき事を以（も）（て）、小児の、あしき事をいましむるを云。是必（ず）後の福（さいほ）となる。姑息とは、婦人の小児をそだつるは、愛にすぎて、小児の心にしたがひ、氣にあふを云。是必（ず）後のわざはひとなる」（巻之一）

「姑息」とは、辞書によれば「一時のまにあわせ」とか「一時のがれ」「しばらくの安きをぬすむの意」と記されており、「姑息の愛」ということは、近視眼的愛情を意味していると理解するのである。

益軒は、「姑息とは、婦人の小児をそだつるは、愛にすぎて、小児の心にしたがひ、氣にあふを云。是必（ず）後のわざはひとなる」と具体的に説明を加え、ただ徒らに子どもの言うがままに何でも親が許してしまうことが、姑息の愛であるという。

「婦人及（び）無学の俗人は、小児を愛する道をしらず、姑息のみにして、ただうまき物を多くはせ、よききぬ（衣）を

あたたかにきせ、ほしいままにそだつるのみ、其（の）子を愛するとおもへり。是人の子をそこなふわざなる事をしらず」（巻之一）

益軒が保育者の資格として、学問の必要性を提唱したことは、先に記した所であるが、「姑息の愛」の原因が、無知の故に子どもを客観的に観察し、理解することが出来ない結果の誤りであると指摘している。教育は、愛であると同時に智でなければ、愛は盲目の愛となることを教えている。「科学の無い所では愛は無力であり、愛がなければ科学は破壊的である」といったバートランド・ラッセルの言葉を思い出すのである。

次に「姑息の愛」の結果は「不肖の子」になると語っている。

「姑息の愛すぐれば、たとひあしき事を見つけても、ゆるしてしましめず。およそ人のおやとなる者は、わが子にまさるたからなしとおもへど、其（の）子のあしき方にうつりてのちは、身をうしなふ事をも、かねてわきまへず、居ながら其（の）子の悪におち入（い）を見れども、わがおしえなくして、あしくなりたる事をばしらで、只、子の幸なきとのみ思へり。又、其（の）母は、子のあしき事を、父にしらす、常に子のあやまち（過）をおほひかくすゆへ、父は其（の）子のあしきをしらで、いましめざれば、悪つゝに長じて一生不肖の子となり、或（は）家

と身とをたもたず。あさましき事ならずや。程子の母の曰、  
「子の不肖なるゆへは、母其(の)あやまちをおほひて、父し  
らざるによりりと、へるもむべなり」(卷之二)

子どもの教育は、母親だけの責任ではなく、父親もその責任の重いことに言及している。益軒当時の家庭は、家父長的家族制度であり、家長としての父親の権威への怖れから起こる特別な母と子の結びつきが推察される。その結果、不肖の子の原因が、姑息の愛の結果であり、また父と母と子との正常な愛情関係の破れからであることを指摘している。

「又、男子、只一人あれば、きわめて愛重すべし。愛重するの道は、おしえいまして、其(の)子に苦勞をさせて、後のためよく、無病にてわざはひなきやうに、はかるべし。姑息の愛をなして、其(の)子をそこなふは、まことの愛をしらざる也」(卷之二)

アメリカの児童心理学者スタンレー・ホールは、「一人っ子であることは、すでにそのことだけで病氣である」といったが、益軒もまた特に一人っ子の教育に思いをいたして、姑息の愛に陥らないように戒めている。第二に戒めていることは、「愛におぼれてはならない」と、溺愛的態度についてである。

「もし父として愛におぼれて、子のあしきをしらず、性行よ

からざれども、君子のごとくほめ……」(卷之二)

「父母は愛におぼれて、只、其(の)氣ずい(隨)にまかせて、放逸をゆるしぬれば、いよいよ其(の)心ほしいままになりて、ならひて性となりぬれば、よき事をきらひ、むつかしがりて、氣つまり病をこるといひてつとめず」(卷之二)

溺愛的態度は、子どもの善悪を正しくしつづけることも出来ず、誤った子ども中心の育て方によって子どもは、わがまま、無氣力、無責任、忍耐力欠如等といった望ましくない問題の子どもになることを益軒は警告しているのである。

第三の戒めは、「初生より愛を過すべからず」という親の過保護的愛情についてである。

「凡(そ)小兒をそだつるに、初生より愛を過すべからず。愛すぐれば、かへりて、兒をそこなふ。衣服をあつくし、乳食にあかしむれば、必(ず)病多し。衣をうすくし、食をすくなくすれば、病すくなし。富貴の家の子は、病おほくして身よはく、貧賤の家の子は、病すくなくして身つよきを以(て)、其(の)故をしるべし」(卷之二)

「父母の愛すぐる故、あまえて父母をおそれず、兄をないがしろにし、家人をくるしめ、よろづほしきままにして、人をあなどる」(卷之二)

過保護的な愛情は、かえって子どもを害うものであり、身体面では子どもの厚着過食になれさせる結果、病弱な身体に迫りやる。精神面では、依頼心の強い自主性のない自己中心的な性格の人間になると注意を促している。

益軒は、子どもの教育に当たって、正しい子どもの理解に欠けた盲目的愛情や、感情的で決断的に行動できない溺愛的態度や方法論的無知による過保護の愛情などの、親の陥り易い近視眼的愛情の誤りを指摘し、真実の教育愛にめざめ、親としての子どもに対する教育的責任と役割を明らかにしているのである。

おわりに

以上、二回にわたって『和俗童子訓』を中心として、貝原益軒の保育観の考察を試みて来たのであるが、益軒の幼児教育への主要な提言は、「予めする教育」、「左右の人をえらぶべし」、「姑息の愛をなすべからず」ということに要約することができると思う。即ち、子どもは良い環境の中で、正しい愛情によって未だ悪にうつらない早い時期から教育を始めることが、幼児教育の原理であると主張している。

益軒の保育思想が、このように近代的幼児教育を指向してい

るのにもかかわらず、時代的、文化的隔りや、思想的基盤での異質性を含んでいることは否定できない。故に、益軒の保育思想をそのまま現代的に解釈することに抵抗があるかもしれないのである。しかし、益軒が幼児教育における本質的な基本的原理を明確に示唆している点は、現代においても、益軒の保育思想に学ぶべき多くの点を見出すものであり、また、わが国の幼児教育史上の足蹟として特筆に値するものである。

(蕪英女子短期大学)

〔引用文献〕

① 貝原益軒著 和俗童子訓(貝原益軒室 鳩巢集石川松太郎校註)

玉川大学 昭四三

② 山下俊郎著 教育的環境学 岩波書店 昭三八・一一頁

③ 日名子太郎著 保育学序説 福村出版 昭四一・七一頁

④ 波多野完治著 精神発達の心理学 大月書店 昭三八・六六頁

⑤ ローベルト・アル コメニウス 昭三四・

ト著 江藤恭二訳 の教育学 一〇六頁

⑥ ジョン・デューイ 教育信条 昭三一・

著 児玉三夫訳 春秋社 一〇六頁

⑦ 井上 忠著 貝原益軒 吉川弘文館 昭三八・

⑧ 井上 忠著 前掲書⑦「読書 三三一頁

⑨ 井上 忠著 前掲書⑦「略年譜」 一八六頁

⑩ 井上 忠著 前掲書⑦ 三三六頁